

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13154

研究課題名(和文) 指示場面におけるやりとりと指示詞体系の創発

研究課題名(英文) Emergence of a demonstrative system in reference events

研究代表者

平田 未季(HIRATA, Miki)

北海道大学・高等教育推進機構・准教授

研究者番号：50734919

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：指示詞は常に複数の代替形を持ち複数の統語範疇にまたがる体系をなす。本研究では、自然談話データを用い、指示詞が持つ体系性が、人のコミュニケーションの基盤となる共同注意の成立にいかにか寄与しているのかを分析した。

結果、(i)成人間の共同注意場面では、話し手は聞き手の注意状態を推定し、共同注意の確立と会話の進行の両方を考慮しながら、指示詞の直示素性・質的素性・統語素性を切り替えていること、しかし(ii)人と犬のやりとりでは、直示素性の切り替えは生じるものの、質的素性・統語素性の使い分けは起きないことを示した。この分析から人が共通理解に至るために必要な言語の体系性とは何かを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、言語学の立場から、学際的に注目が高まりつつある共同注意場面の研究に寄与するものである。本研究の分析対象である共同注意場面は、言語学のみならず、発達心理学、認知科学、脳科学、ロボット工学等、ヒトのコミュニケーションを扱うすべての分野で注目を集めており、言語の起源および文化的進化を考える上でも重要な社会的行動だと考えられている。本研究は、共同注意場面の研究に欠かせない指示詞を、自然談話データを用い、注意などの学際的な概念を導入して分析した。これにより、他分野でも応用可能な、分野横断的な分析の枠組みを提供することができた。

研究成果の概要(英文)： Demonstratives cross-linguistically form systems with several alternative forms and syntactic categories. This study used natural discourse data to analyze how demonstrative systems contribute to the establishment of joint attention, which is the foundation of human linguistic communication.

This analysis led to the following two conclusions. (i) In joint attention situations between adults, speakers estimate the status of addressee's attention to the referent and consider both the establishment of joint attention and the progress of the conversation, and select deictic, qualitative, and syntactic features of demonstratives. (ii) In interactions between humans and dogs, however, speakers switched only deictic features but did not change qualitative or syntactic features. This analysis revealed the importance of linguistic systems in reaching shared understanding among humans and also which systems are important.

研究分野：語用論

キーワード：共同注意 指示詞 注意誘導 直示

1. 研究開始当初の背景

指示詞は、ほぼすべての言語において、共通の語根から派生する複数の代替形を持ち、複数の統語範疇にまたがる体系を成している。これは指示詞と他の言語表現を区別する顕著な特徴であるが、なぜ指示詞が言語普遍的にこのような体系を形成するのかについて議論した研究はこれまでなかった。

具体的に説明すると、指示詞体系は以下の3つの要素からなる (Diessel 1999)。

- (1) 直示素性 (deictic feature): 発話空間から指示対象を特定することに寄与する情報を示す。体系内で生産性を持つ語根となることが多い(直示語根 deictic root; 日本語の場合、コ、ソ、ア-)。
- (2) 質的素性 (qualitative feature): 事物・位置・人、有生性もしくは性・数など指示対象を類別する情報を示す。直示語根に派生接辞が付く、もしくは語が屈折するなどして表される(日本語の場合、-レ、-コ、-ッチ、-イツ、-ラなど)。
- (3) 統語素性 (syntactic feature): その形式が現れる統語的な位置情報を示す。直示語根に派生接辞が付くことなどで表される(日本語の場合、-ノ、-ウ、-ンナなど。ただし、(2)の-レ、-コ、-ッチも「代名詞」という統語素性を示す)。

指示詞に関する研究は国内外で数多く行われてきたが、そのほとんどが(1)の直示素性を分析対象としており、(2)、(3)を含む指示詞体系の全体が統合的に分析されることはほぼなかった。

2. 研究の目的

本研究では、なぜほぼすべての言語において指示詞が(1)、(2)、(3)の素性からなる体系を形成するのかという問いに答えるべく、日本語母語話者間の自発的なやりとりを録画・録音したデータを用いて、やりとりの現場で指示詞の意味的・統語的多様性がどのように利用されているのかを分析した。

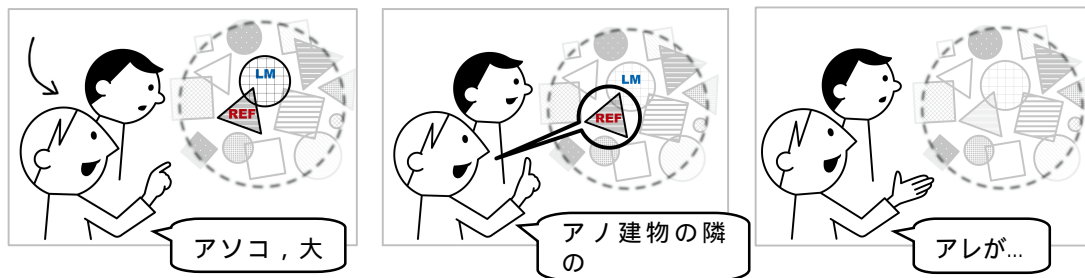
3. 研究の方法

近年、指示詞が持つ「周囲の環境内の事物に共同注意の焦点を当てる」(Levinson 2018: 2)機能が注目され、使用場面に基づく分析が活発に行われている。しかし、その多くは、指示詞が含まれる単独の発話のみを分析対象としている。これに対し、本研究では、会話分析の手法を用い、眼前の対象への互いの視覚的注意の誘導から、視覚的注意が共有された対象に関する言語的叙述の開始・終了までを含む一連のやりとりを分析対象とした。これにより、発話毎に変化する聞き手の注意を効率的に調整するために、直示素性のみならず、質的素性・統語素性を含む体系性が必要であること、さらに、指示詞が複数の代替形を持つことが、物理的な文脈を参照させる外部照応 (exophoric use) と言語内的な指示である内部照応 (anaphoric use) とを含む複雑なやりとりの構造化に大きく寄与していることを示すことができる。

具体的な研究方法は以下の通りである。屋外での日本語母語話者の自然談話から、発話空間の物理的な対象に向けて互いの注意を誘導する共同注意場面を抽出した。次に、Butterworth (1995) を参考にこの共同注意場面で行われるやりとりを以下の3つのプロセスに分けた。

(4) 共同注意場面における3つの指示タイプ

- | | | |
|-----------------------------------|--------------------------------------|---|
| a. 注意の転換
(attention-switching) | b. 注意の調整
(attention-coordinating) | c. 共同注意の確立後
(after establishing joint attention) |
|-----------------------------------|--------------------------------------|---|



最後に、これらのプロセスで生じる会話を分析し、指示詞の選択傾向について調査した。

4. 研究成果

分析の結果、それぞれのプロセスで以下のような指示詞の選択傾向があることが明らかになった。

【注意の転換】

(4a) の指示は、指示対象が相手の視野に入っていないと話し手が判断した場面で行われる。話し手は、指示によって、相手の頭・顔・目の向きを動かし、相手の視線を指示対象が存在する空間に向けさせようとする。この指示では、手さしや腕を伸ばした指さしなどの大きなジェスチャーとともに、位置や方向を示す空間指示代名詞 (-ッチ、-コ) が選択される傾向がある。

【注意の調整】

(4b) の指示は、相手の視野内に候補となりうる対象が複数含まれると話し手が判断した場面でされる。話し手は、複数の候補の中から意図する指示対象を相手に検出させるため、ランドマークとなる対象および指示対象自体について、言語的な描写や図像的ジェスチャー (iconic gesture) といった非直示的な情報、(4a) よりも精密に対象の位置を指し示す指さしによる情報などを提供する。これらの情報には指示詞が付加されるが、その際、言語情報には名詞句と統語的に共起可能な決定詞 (-ノ) が、図像的ジェスチャーには様態を表す副詞 (-ウ) が付加される傾向がある。

【共同注意の確立後】

(4c) の指示は、相手の反応・発話から、相手の視覚的注意が意図する対象に向けられていると判断可能な場面で、その共同注意が確立した対象を後続の談話に持ち込む際に行われる。多くの場合、指さしなどのジェスチャーは停止される。加えて、これまでの活動との切り替わりを示すため、指示詞の形式が切り替えられる。この時、指示詞の中でも最も情報量が少ない指示代名詞 (-レ) が選択されることが多い。

以上の (4a-c) のプロセスを含む一連の会話を会話分析の専門家とともに分析した結果、共同注意確立のためのやりとり ((4a, b)) はやりとり全体の目的 (Main Activity (MA)) を遂行するための Side Activity (SA) として生じる強い傾向があることが分かった。

以上の分析から、会話参加者は、SAとしての共同注意確立までの各プロセス ((4a, b))、共同注意確立後のSAから本線の会話であるMAへの移行時 ((4c))、さらに、その後のMA内での対象の再指示において、指示詞が有する複数の代替形と統語範疇を頻繁に切り替えながら、効率的に相手の注意を対象に誘導するとともに、発話時にやりとりがどの局面にあるのかを互いに明示していることが分かった。先行研究では、指示詞は人の言語を用いたコミュニケーションの基盤である共同注意に最も寄与する言語表現であるとされているが (Diessel 2006など)、それらの研究が分析対象としていたのは直示素性のみであった。本研究では、自然談話の分析をもとに、指示詞の質的素性、統語素性もまた、相手の注意の調整と共同注意の効率的な確立に深く寄与していることを示すことができた。



また、本研究では、成人日本語母語話者館の会話に加え、成人日本語母語話者とペット (犬) の間のやりとりのデータ (4組、計 100分) を収集し、同様に共同注意場面を抽出し、(4a-c) の3つのプロセスに分け、指示詞の選択傾向の分析を行った。人と犬のやりとりでは、人と人のやりとりに比べ、(4a) 注意の転換タイプの指示が圧倒的に多かったが、(4b) 注意の調整、(4c) 共同注意の確立後の指示も観察された。

指示詞の選択については、さらに顕著な違いがみられた。人が指示詞を用いて犬に指示を行う際、対象の空間的な位置に応じた直示素性の切り替えは生じる (「(雪玉を持って)これ、とってきて」(写真参照)「(犬が加えてきた雪玉を見て)それじゃないよ。それ違うでしょ」) が、(4a-c) のプロセス毎の形式の切り替え、すなわち相手の注意状態の変化に応じた質的素性・統語素性の切り替えはまったく見られなかった。犬が思うような反応をしない (意図する対象がある方に視線を向けられないなど) 場合も、人同士であれば生じる指示形式の切り替えは起きず、同じ形式が繰り返されるのみであった (「(雪玉がある方向を指して)こっちだって」「(違う方向を見ている犬に対し)こっち、こっち」)。

以上の分析結果から、(i) 人が、周囲の物理的な存在物に共同注意の焦点を合わせ、それを言語を用いて間主観化し、純粹に言語的な談話に持ち込んでいくやりとりにおいて、同一の対象を指し続けるために指示詞は直示素性のみならず質的素性と統語素性を含む体系性を必要とすること、(ii) 質的素性と統語素性はそれぞれ対象の類別、当該表現が現れる統語環境を示すための情報を持つが、実際の運用において、これらは指示対象への聞き手の注意の状態の推定に基づき選択されること、(iii) 会話相手が自分と同様に「意図」を持つとみなせない相手である場合、直示素性の切り替えは生じるが、このような質的素性と統語素性を利用した注意誘導はみられないことが明らかになった。

指示詞の直示素性が示す情報は、発話空間での指示対象の位置を指し示す指さしジェスチャーと連続性を持つ (Enfield 2009)。一方、質的素性・統語素性はより言語内的な情報である。本研究の結果は、指示詞が、繰り返される共同注意場面の中で、自らとは異なる心の状態を持つ他者と意図を共有するために、指示対象の位置を特定することに寄与する直示素性に加え、他の言語表現やジェスチャーと協働しながら、効率的に相手の注意を対象に誘導することを可能にする質的素性・統語素性を派生させてきた可能性を示している。

【参考文献】

Butterworth, G. 1995. "Origins of Mind in Perception and Action." In: C. Moore and P. J. Dunham (eds.)

- Joint Attention: Its Origin and Role in Development*, 29-39. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.
- Diessel, H. 2006. Demonstratives, Joint Attention, and the Emergence of Grammar. *Cognitive Linguistics* 17: pp. 463-489.
- Diessel, H. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. (Typological Studies in Language 42) Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Enfield, Nick J. (2009) *The anatomy of meaning: Speech, gesture, and composite utterances. Language, culture and cognition* 8. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S. C. 2018. Demonstratives: Patterns and Diversity. In Levinson, S. C., S. Cutfield, M. J. Dunn, N. J. Enfield and S. Meira (eds.) *Demonstratives in Cross-Linguistic Perspective (Language Culture and Cognition)*, pp. 1-42. Cambridge: Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 平田 未季, 趙 文騰, デ・オリベイラ・パイバ・ドウグラス・エンリケ
2. 発表標題 なぜ指示詞はつねに複数の代替形と統語範疇を有するのか
3. 学会等名 日本言語学会第163回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平田未季
2. 発表標題 共同注意場面による日本語指示詞の研究 やりとりの分析に資する新たな意味論の構築を目指して
3. 学会等名 日本語音声コミュニケーション学会春季研究集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 平田 未季	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 32
3. 書名 「直示的なやりとりにおける間主観化のプロセスについて」加藤 重広、滝浦 真人編『日本語語用論フォーラム』	

1. 著者名 平田 未季	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 共同注意場面による日本語指示詞の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------